報　告

対話的なアクティブラーニング実践：韓国（語）学習コミュニティと留学ロードマップ[1]

Report on active learning : The management of the korean learning community and the creation of road maps for overseas countries

金　恵媛*　　石原　さや**　　木下　裕賀**
山口県立大学国際文化学部
Hyeweon Kim　　Saya Ishihara　　Yuka Kinoshita
Faculty of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University

要旨：
本稿は、卒業演習の一環として行われたアクティブラーニングに関する２つのプロジェクト活動の報告である。プロジェクトの内容は、韓国（語）学習のコミュニティの運営と留学ロードマップの作成であり、学生主導によって行われ、卒業演習を通してPDCAを重ねた。プロジェクトの目的は、本学における韓国（語）学習の環境改善と、学生のアクティブラーニング能力の向上にある。

キーワード：主体的・対話的な学び、学習コミュニティ、留学ロードマップ、韓国学、卒業演習

Abstract：
This paper is a report on two projects concerning active learning which is conducted as part of the graduation seminar. The projects are on the management of the Korean research community and the creation of a roadmaps for overseas countries the two main objectives of for this project is to improve the learning environment of Korean studies at our university and the improvement of the students' active learning ability.

Key words：Active learning, Community of studies, Roadmap for abroad, Korean studies, Graduation Seminar

1　はじめに

本報告は、山口県立大学国際文化学部国際文化学科の韓国社会論研究室（以下、韓社研）の2017年度の卒業演習活動についてまとめたものである。国際文化学科のカリキュラムマップ（履修系統図）を見ると、「卒業演習Ⅰ・Ⅱ」は「研究室においてゼミナール形式」で行われ、「これまでの学修の集大成」を行う「行動力」の強化が期待される科目として、4年次に配当されている[2]。これを受けて韓社研では毎年、韓国をキーワードに含む「学生各自が選んだ課題・テーマに即して」学修成果物を完成すること、学生が「学習過程のなかで、自らが発見・分析した問題の解決に資する方法を見出し、提案することを通して、国際的な行動力を養う」ことを目標に卒業演習を展開している[3]。

もう一つ韓社研での卒業演習の特徴的な取組とし

* 山口県立大学国際文化学部教授
** 山口県立大学国際文化学部国際文化学科４年

て、毎月定例開催される「やまぐち韓国研究会[4]」の活動を挙げることができる。学生会員として定例会の諸活動に参加するとともに、定例会において卒業演習の進捗状況について定期的に報告することが推奨されている。7月には、研究会会員を招いて3・4年生合同による「専門演習Ⅰ」「卒業演習Ⅰ」の中間報告会を開催し、翌年2月には定例会の中で最終報告を行う流れとなっている。演習経験者である卒業生会員からの探究ノーハウや、研究の実践面、成果の社会還元に関心の高い地域会員からの指摘をいただく貴重なチャンスである。学内での議論とは異なる視角からのアドバイスが多く、学習意欲の刺激、演習活動に関するPDCAを活発化する効用が認められる。アンケート調査、またはフィールドワーク調査を共同で行うことも少なくない。世代、関心領域にとらわれない学びの共同体であり、大学での学びを社会人基礎力として発展させる優れた効果があることは取り立てて言及するまでもないだろう。

2017年度の卒業演習の方向性について議論を重ねた結果、本学の韓国（語）学習環境について学生の観点から見直しを図ることに演習テーマが絞られた。本学における韓国（語）学習環境に大きな変化が生じたことを受け、課題解決のためのプロジェクトを立ち上げたのである。本学では、2012～2016年度においてグローバル人材育成事業（経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援）が行われた。国際文化学科においては重点外国語である英語・中国語・韓国語の学習会運営、海外留学の奨励などの外国語学習の基盤づくりが進められるようになった[5]。

2016年度に当該事業が終了したことにより、それまで蓄積してきた学習環境を完全に大学による自主運営に切り替えていかねばならなくなった。このことにより韓国（語）学習環境が大きく変化したのであり、本プロジェクト立ち上げにつながったのである。

もう一つ、学習会活動や留学を体験した上級生が自らの経験知を共有したいという思いと、韓国（語）という同じ学習関心を持つ仲間グループを維持、発展させたいということから、学生主導による本プロジェクトへ繋がった。

PBL型、特に実践体験型PBL学習（Task-based Learning, Project-based Learning）は学生の自主的な取り組みがカギとなる[6]。学生の問題関心が韓国（語）学習環境の改善で共通していることから、卒業演習をグループ討論の場として活用しながら各自の関心テーマの活動を展開し、活動結果を卒業報告としてまとめることになった。

韓国語学習から韓国留学へ、そして留学経験を発展的に共有する学びの共同体を作るアクティブラーニングとして、韓国（語）学習・交流コミュニティの組織化、韓国留学成功のための手引きを作成することが主な活動内容である。学生主導のプロジェクトとして立ち上げ、活動のPDCAを卒業演習と連携させ、最終的には卒業報告として学びの過程・成果を報告することが、卒業演習プロジェクト全体、卒業演習のイメージである[7]。

韓国（語）学習・交流コミュニティづくり（石原）及び留学の手引きの作成（木下）の2つのプロジェクトは、原則１つのプロジェクトを1人が推進主体となって行っている。しかし、2つの活動の最終目的が韓国（語）学習のための学内外の環境整備という点で共通していることから、両プロジェクトの相乗効果を高められるように工夫しながら活動を展開した。教員は実践を支援する役割を担い、学習ガイドの提示、卒業演習のなかでの報告・討論を通して課題解決のためのPDCAに一緒に取組んだ。

以下においては、韓国（語）学習コミュニティ「ELC+K@YPU」活動及び韓国留学の手引き「YPU留学ロードマップ」作成のそれぞれの活動の進展状況、成果と課題を中心に報告する。

2　プロジェクト（1）：「ELC+K@YPU」

2-1　活動のきっかけと目的

2016年度をもって終了した外国語学習会は、言語スキルの獲得のみならず、同じ学習関心を持った学生同士のつながりを強化する役割を担っていた。石原と木下は1年次には学習者として学び、2年次には学生スタッフとして学習会の企画運営に関わった。学習会での学び、交流をベースとして3年次には韓国留学に飛び立った[8]。外国語学習会は低学年の学習者にとっては、先輩・身近なロールモデルとの日常的な交流ができる場であった。運営スタッフとなる留学経験者にとっては自らの経験を活かすとともに、自らの留学生活を省察し社会人生活につなぐ機会でもあった。このような学習会の存在意義についての確信が、大学主導の学習会に代わる学生主体の学習会、学びの共同体への思いとなり、実践に移すことになったのである。

従来の外国語学習会の良さを引き継ぐととも

に、学生主体の活動であることから特に活動の持続性に重点をおいた。活動名は「ELC+K（イーエルシープラスケイ）@YPU」である。Kは韓国（Korea）を意味し、韓国に興味関心のある学生が、韓国語や韓国文化を通して学年や学科、国境を越えて様々な価値観に出会い（Encounter）、学び（Learn）、そして学生自らが主体となってその場を創る（Create）ことを目的とする。活動の成果として学生が本活動への参加を通してタテ（学年や世代）、ヨコ（大学や国境）のボーダーを越えた繋がりを広げていき、国内外での活動を活性化できることを目指す。

2-2　先行研究

プロジェクトの実施にあたって、先行研究を手掛かりに、本学での外国語学習会のふり返りを行うとともに、学生主体の学習コミュニティにどのような役割が期待されているかについて検討した。金・森原（2015）から外国語学習会の実態及び課題についてみると[9]、本学の外国語学習会は2013年度後期より本格的に活動を開始し、学習サポーターは「教員と学生を結ぶ懸け橋になること」、「学習仲間・学習コミュニティをつくること」、「後輩学習者の身近なロールモデルになること」の３点を役割として担い、大学の支援を得ながら企画運営を行っていた。英語、韓国語、中国語、スペイン語の学習会が運営され、なかでも韓国語学習会では検定対策講座へのニーズが高かった。事実、学習会での対策講座の実施効果として検定合格率の向上が確認された。一方で課題としては、参加者数の確保や、上級生の言語学習の持続と中級以上の受験者向けの学習フォロー強化が挙げられていた。

外国語学習会の実績と課題を参考にプロジェクトの内容を組み立て、活動を開始した。さらに、学生が主体となる活動であるため、次年度以降も活動が持続できるように低学年の参加と学習会の体系化が重要であることがわかった。

2-3　活動の概要

「ELC+K@YPU」の活動は、定期の韓国語学習会と不定期の交流イベントに分けられる。韓国語学習会は毎週水曜日の４時限目（14：40〜16：10）に実施している。開催場所は、視聴覚教材の使用ができるLaLabo教室または学内の空き教室である。留学経験者、昨年度までの学習会参加経験者など、韓国語学習会の必要性を強く感じていた仲間が中心となって活動の企画運営を行っている。学習内容としては、K-POPや韓国ドラマで使われるフレーズ、現地での生活経験の中で印象的だったことを主に取り上げた。「ハングル能力検定試験」（6月と11月の毎年2回本学に準会場が設置される）の前には検定対策講座を実施してきた。検定試験の頻出文法や過去問題の解説を行い、受験のサポートを行っている。この他に、授業外での自主学習のサポートとして、1年生の韓国語プレゼンテーション準備、姉妹校の学生との交流会の支援を行ってきた[10]。

活動終了後には日誌を記入し、卒業演習においても活動報告と課題解決に向けての議論を重ね、PDCAを徹底して行った。PDCAによって明らかになった目的分野ごとの実施内容と省察は〈表1〉の通りである。

2-4　活動の成果

学生が主体となる韓国（語）学習コミュニティとして現在も運営中である本プロジェクトの成果について考察する。

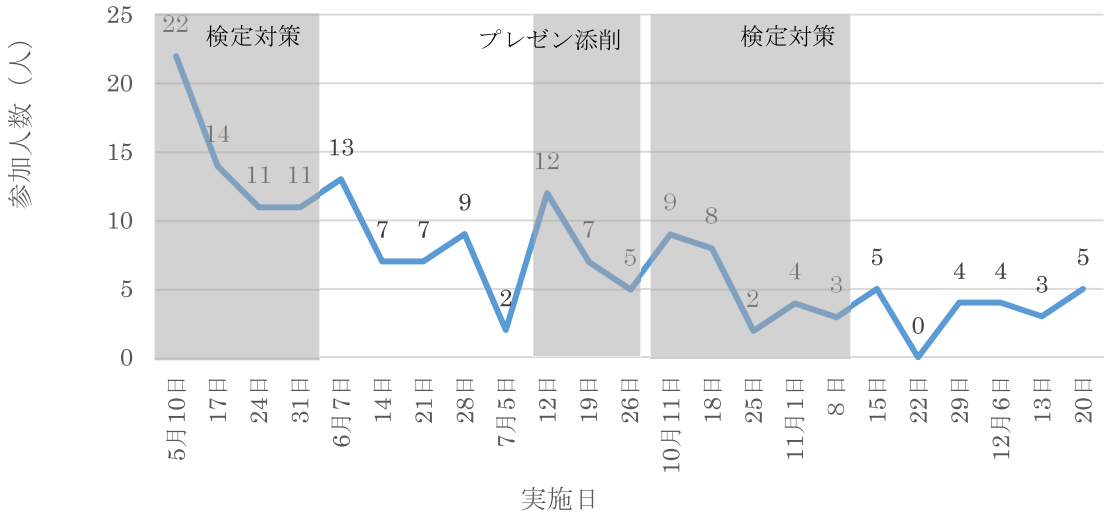
定期の韓国語学習会では、初回の５月10日から12月20日現在まで計23回の学習会を実施している。参加者数の推移は〈図１〉のグラフの通りであり、増減はあるものの一定の参加者を確保することができている。学習会の企画の際には、実用的な韓国語を如何に楽しく身に着けるかに重点を置き、授業との差別化を図った。また、参加者の興味関心のある分野を事前に聞き、随時学習会の内容に反映している。さらに、検定対策に関しては、授業の既習範囲と受験級の出題範囲の差を埋めるとともに、勉強法のアドバイスも行った。〈図１〉における検定対策期間の参加者数を見ると、序盤には多くの参加者があるが、本学の学祭の時期と重なっていることもあり、徐々に参加者が減る傾向にある。しかし、検定の予想問題を作成し学習会で扱った際には、「実際の試験の時に予想問題と類似したものが出題されたので、学習会で学んだことが役立った。」という参加者の声もあり、学習会への参加が学生の韓国語力向上に寄与したことがわかった。

不定期のイベントでは、４月末に「日韓交流イベント」を実施した。本学の韓国人留学生５名と、韓国に興味関心のある学生同士の交流の場を設けた。国際文化学科を中心に、文化創造学科、社会福祉学

〈表1〉「ELC+K@YPU」プロジェクトの実施・改善状況

項目（計画・目標）		実行	課題と改善策
Encounter（出会う）	学年・学科を越えた出会いが実現する	・日韓交流イベントを開催した（参加者45人） ・韓国語学習会の実施を行った ・韓国留学中の本学生徒とのオンライン交流を実施した	・韓国語学習会への参加者層の拡大を図る →学習会のチラシの作成・配布、直接的な呼びかけを実施する
	韓国人留学生との交流の機会を増やす	・日韓交流イベントへの留学生の参加を促した ・学習会の主力メンバーとして留学生の協力を得た	・現在のプログラムでは留学生の役割が明確でなく、継続的参加は期待しにくい →韓国人留学生が主体となって進められる学習会の計画（韓国の大学生活、文化の紹介など）を行う
	学外との繋がりを活性化する	・「韓国語Ⅰa」授業における姉妹校との交流のサポートを行った ・学外での日韓交流事業やボランティア活動の情報を共有した ・他大学の学生の参加を得た	・学習会自体に学外の人が関わる機会が少ない →学外への広報を行い、学習会内での学外との交流の機会をつくる
Learn（学ぶ）	授業との差別化を図る	・場面を想定した会話表現や単語を学習内容として扱った ・韓国料理の体験学習を実施した ・流行している社会文化現象や若者言葉を提示した	・内容選定に時間がかかり資料の作成が困難だった →次年度以降は前年度の資料が活用できるようにデータの蓄積、体系化を行う
	参加者の需要にあった内容を工夫する	・K-POPや韓国映画などを題材に視聴覚教材を多用した	・学習会への要望の確認が不十分であった →参加者の韓国語学習状況や関心分野をヒアリングし随時繁栄
	検定対策学習会を実施し、受験をサポートする	・オリジナルの予想問題を作成した ・出題範囲と既習範囲の差を埋める文法等の解説を行った	・受験者の出題範囲やレベルに対する認識が不十分であり、学習意欲の低下がみられた →検定申し込み前に各受験級の出題範囲や特徴を伝え、学習状況のヒアリングを行う
Create（創る）	学生が主体となって企画運営を行う	・日韓交流イベントを開催した ・韓国語学習会の企画運営を行った	・参加者数が一定しない →定期的にイベントを開催し学習会参加に繋げる ・学習会運営における役割分担が不十分であった →学年別に学習会の内容に変化を与えるなど役割分担を徹底する
	参加者の主体的活動を支援する	・姉妹校との交流の企画をサポートした（「韓国語Ⅰa」履修者） ・授業での個人発表の添削と指導を行った（「韓国語Ⅰa」履修者）	・参加者が受動的であった →1年生によるイベントの企画を増やし、体験機会を増やす →学習会の中で参加者同士が発言や発表を行う機会を増やす

〈図１〉学習会参加者数の推移



※最多参加者数：22名（5月10日）、延べ参加者数：167名

科、栄養学科から計45名の参加があった。イベントでは、韓国に関するクイズやジェスチャーゲーム、フリートーク等を行い、韓国（語）によって繋がる学生の輪を広げた。また、イベントの際に学習会の広報を行い、初回の学習会には20名以上の参加があった。イベントの実施が継続的な学習会参加への入り口となることが明らかになったため、今後も積極的に企画を進めたい。

学習会、イベント共に参加者の多くは国際文化学科の１年生であった。企画運営を行う上級生との関わりや韓国人留学生の参加もあり、学年や国籍を超えた出会いの場になっている。また、参加者の中には韓国留学を希望している学生もおり、留学経験者や交換留学準備中である企画運営者に留学相談をする姿もしばしば見られた。単なる韓国（語）学習の場ではなく、学生の活動や繋がりをタテヨコに広げるコミュニティを運営するという当初の目的が達成できているように思われる。

2-5　課題と改善

プロジェクトを推進するなかで浮上した課題についても触れておきたい。「ELC+K@YPU」は学生が運営主体となる活動であり、主要メンバーの留学や卒業などによって運営が困難になることが想定される。2017年度の活動において推進主体となっている学生が不在となる次年度以降の活動継続のためには、低学年を企画運営に巻き込んだコミュニティの組織化が必要となった。

また、これまでの活動を通して、印刷費等一定規模の活動費が必要であることも分かってきた。データをあらかじめ参加者に提示して印刷は個人に任せるという案もあったが、ハングルを書くことに慣れていない参加者も多く、やはりデータを印刷して配布することが最も効率的で学習に効果があると考えた。そこで、本活動をサークル化する方針を検討するに至った。10月に同好会設立の申請手続きを行ったため、来年度からは大学に認められたコミュニティとして活動できるめどが立った[11]。書類作成時には1年生を中心に部員としての署名をもらい、来年度からの活動参加への意志を確認した。低学年に活動関連の手続きに慣れてもらう意図もあった。今後は次年度以降の活動継続を意識し、低学年のコア化を目指して活動を進める。

次に、企画運営側への負担という問題である。学習会の計画や資料作成、広報、実施に至るまで全て学生の手作りで行うものであり、準備の負担が大きかった。特に留学を終えて帰国した４年生の場合は就職活動との並行で急なスケジュール変更もしばしばあるため、長期ビジョンによる企画と準備が難しいことも多々あった。企画運営を行う学生の負担が偏ることにより、活動が滞ってしまう可能性も懸念されるため、今年度の活動のデータを蓄積、体系化することにした。データを引き継ぐことによって、活動やそれに向けての準備の作業量などが可視化でき、活動の企画運営をより効率的に行うことができる。

今年度の活動が終わる1月末までに、これらの対応策を実践し、確実に次年度以降に引き継げるように努める。

3　プロジェクト（2）：「YPU留学ロードマップ」作成

3-1　活動のきっかけと目的

留学準備において、当事者である学生が受け身になることが少なくない。本学の場合、高等教育センターからの留学情報、留学報告会、あるいは個人的なネットワークが留学に関する主な情報源となる。留学経験者による「留学体験レポート」は、現地での体験に基づく情報として貴重であるが、内容が相対的に定型化されている。留学を成功させるためには、留学中のリスク対応や留学終了時の達成状況、さらに卒業後の成長を描く想像力が求められる。したがって留学の準備段階から大学卒業後を見据えて計画していくことが重要である。海外での長期にわたる生活からくる不安、リスクに備える観点からもよりていねいで、かつ自分の学習目的に適した留学計画が必要であると考える。

そこで、本学の学生の入学から卒業までの学習生活の中で留学という軸を設け、留学の準備から終了、成果の還元までを視野に入れた留学ロードマップを作成することにした。本学の制度、留学に向けての学生の意欲や経験値などを踏まえて、どの段階でどのような準備が必要か、大まかなパターンを描くことになる。

留学を考えている学生が効率的な準備を行えること、留学後もスムーズに大学生活に戻り、留学経験が就職活動の中で活かされること、留学を軸にした大学生活が俯瞰できることを念頭においた。これから留学を計画する学生に有用な留学報告にはどのような内容が求められるのか、どういった発信方法がわかりやすいかなども視野に入れてロードマップを作成することにした。本プロジェクトの目的を主に以下の２点に絞った。

①留学前、留学中、留学後にすべきことが一目でわかること。

②留学希望者と留学経験者の連携を活性化する手引きとなること。

なお、ロードマップの基礎をつくるうえで、HRインスティテュートの『ロードマップのノウハウ・ドゥハウ』[12]を参考にした。「ロードマップ作成のフロー」については前掲書にならって「①環境分析から目指す未来を探る、②現状とのギャップから重要課題を洗い出す、③ロードマップの全体フレームを構想する、④ロードマップの軸出し、組み合わせ、軸決めを行い、ロードマップを描く、そして⑤ロードマップを実現する仕組みを考える」（HRインスティテュート著・野口吉昭編：24-26）ようにした。

3-2　大学が提供する留学情報源

本学の留学情報源について確認した。まず、本学の留学情報源として挙げられる「国際交流＆海外留学のススメ2017」、「山口県立大学2018ガイドブック」、「2016年度交換留学・日本語TA派遣学生留学体験レポート」の3つの資料を分析した。交換留学に関する情報としては、対象学年・派遣期間・派遣先・募集時期・留学中の学費・奨学金に加え派遣者数・選考基準・応募条件・申し込み方法・派遣条件が記載されている。そして、留学を経験した学生が、留学前に準備したことや現地生活、留学後の自身の成長などについて書いた留学報告なども簡略に記載されている。以上のように、留学に関する基本的な情報は現行の資料からも得ることが出来る。

留学ロードマップ作りのコンセプトの一つは留学希望者と経験者の連携を図ることである。以下では、留学情報源のうち、留学経験者による「留学体験レポート」についてまとめた[13]。後述のアンケートを比較してみると、留学ロードマップに期待される内容がおのずと見えてくる。

留学経験者は留学のメリットとして「現地での出会いとそのことによって自分が成長できたこと」、「文化の違いを理解するなど物事に対する考え方や行動力に柔軟性が増した」、「積極的に人と関わるようになった」「自分の意見を言う、相手とのコミュニケーションを通して他人と知識、考えを共有する楽しみがわかった」「固定観念にとらわれていた自分から脱することができた」など、コミュニケーション能力や異文化理解能力、行動力など、文部科学省が提唱する「生きる力」が強調されている。「留学中に困ったこと、苦労したこと」としては、「言葉の壁」、「授業で使われる専門用語」などの言語能力の他、「ホームシック」、「自分がマイノリティーなった状況を理解し、適応する過程」、「ルームメイトとのコミュニケーション」、「文化や習慣の違い」「課題の多さ」、「学生の授業態度の違い」、「体調管理」など慣れない生活環境のなかでの苦労が想像できる項目が挙げられている。そして「留学後に大変だったこと」とし

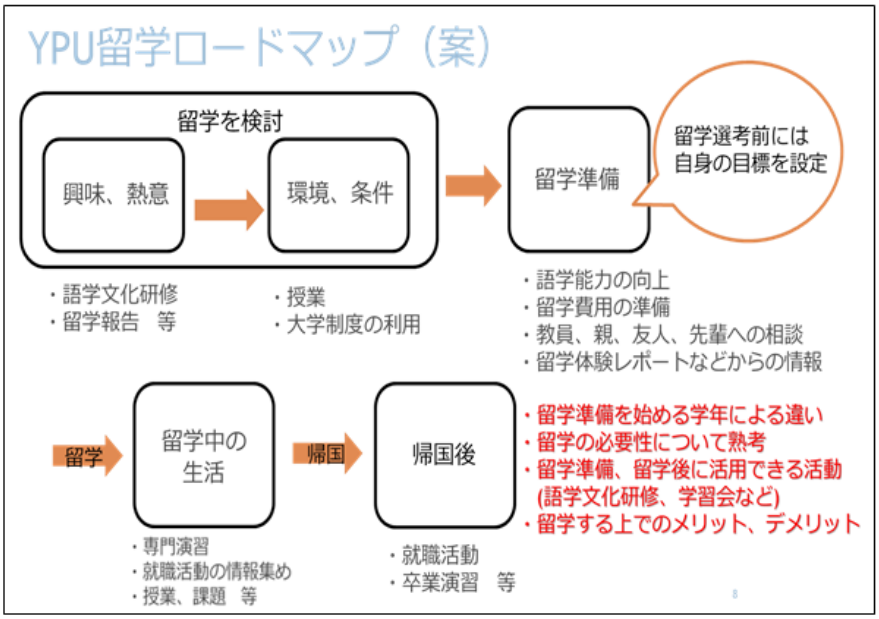
ては、「インターンシップに参加できないことで就職活動に遅れが出る」、「留学を就職活動に有利になる活動としてまとめなおす」、「帰国後すぐに就職活動と卒業演習モードに切り替えなければいけない忙しさ」など、外国にいながら就職活動を準備することの難しさが主な内容となっている。これらの経験から「留学前に準備しておけばよかったこと」としては、「検定対策の日本語版資料」、「話す練習」の言語面の準備、「就職活動に関する情報収集ルートの把握」、「スケジュール把握」といった就職関連、「国内外問わず歴史や政治の勉強」、「日本（サブカルチャー）について勉強」など自他の文化、社会についての知識・理解の側面、そして「活動費」、「体力」、「留学中や留学後の具体的な目標の設定」などがあがっており、言語以外の準備をも強調した意見が多い。

3-3　「YPU留学ロードマップ」の方向性

「YPU留学ロードマップ」（以下ロードマップ）の流れは〈図２〉の通りである。学生が留学を通して、留学前に設定した自身の目標を達成することがロードマップにおけるゴールである。

ロードマップの作成にあたり、留学希望者が考える留学のメリット、知りたいと思う留学情報を明らかにするために国際文化学科の1、2年生を対象にアンケートを実施した。アンケート結果と本学で配布されている留学体験レポートを合わせて本学独自の

〈図２〉「YPU留学ロードマップ」（案）



〈表２〉「YPU留学ロードマップ」作成過程

項目（計画・目標）	実行	改善
本学の留学関連情報（留学制度、留学経験者の報告）を分析する	・「国際交流＆海外留学のススメ2017」と「留学体験レポート」を分析した	・アンケート実施後に分析しやすいように入手できる情報をカテゴリー分けする ・調査が必要な項目（ロードマップ作成に必要であるが報告書に情報が載っていない箇所）のチェックをする
留学の前後で留学に関する考えの差異を確認する	① 留学前（1～2年生）の考え：1、2年生全員が受講する授業時間を利用しアンケートを実施した ②留学後の考え： 3，4年生の報告書を分析した	・アンケート実施にあたって手続き等にある程度の時間が必要であるため、余裕をもって準備する
「YPU留学ロードマップ」を作成する	・アンケート結果と留学後の学生（報告書）の意見を比較した ・本学で得られる情報、得られない情報を区別した	・「ELC+K@YPU」の活動との連携の仕方について考える

ロードマップを作成するが、本稿ではアンケート結果及び留学体験レポートの分析、「YPU留学ロードマップ」（暫定版）作成までを報告する。

3-4　留学に関するアンケート調査の概要

アンケート調査概要は以下の通りである。

・国際文化学科1年生（56人）、2017年10月23日（月）、「異文化交流論」授業内で実施

・国際文化学科2年生（65人）、10月24日（火）、「基礎演習Ⅱ」授業内で実施

アンケートは無記名の選択形式を用い、個人が特定できないようにした。実査前に関係教員（各授業担当者、学部長・学科長）にアンケート内容の確認と実施許可を得た。

アンケート調査やロードマップの作成は卒業演習と連携しPDCAを行った。

〈表２〉

3-5　アンケート結果と分析

留学前の段階である1、2年生が留学についてどう考えているのかについてである。

「留学することのメリット、デメリット」

問　留学することのメリット、デメリットは何だと考えますか？あなたの考えに近い順番に３つお答えください。

「留学の成果として期待していること」

問　留学の成果としてどのようなことを期待していますか？あなたの考えに近い順番に３つお答えください。

〈表３〉留学のメリット・デメリット・期待する成果

留学のメリット、留学の成果として期待していることに関しては1年生と2年生の間に大きな差異は認められなかった。「語学力の向上」、「自身の成長」に重きをおいていることが分かった。また、留学のデメリットについては、両学年ともに「費用がかかる」を1位に挙げていた。一方2位以下では学年別の差異が見られた。1年生は「卒業が伸びる」、「留学準備に時間がかかる」、「履修計画が立てにくい」の順である。それに対し2年生は「留学準備に時間がかかる」、「履修計画が立てにくい」、「卒業が伸びる」の順である。大学生活が始まって間もない1年生は卒業や履修に関してまだ先が見え

※優先順位をつけて３つ選択してもらったため、１位・３点、２位・２点、３位・１点と点数で評価し、その合計点数を記載する。これは表３、４、５すべてに適用している。

〈表３〉留学のメリット・デメリット・期待する成果

留学することのメリット	①語学力の向上	②他の学習に役立つ	③就職活動に役立つ	④視野が広がる	⑤活動範囲が広がる	⑥自身の成長に繋がる	⑦その他
１年生	122	6	23	98	11	76	0
２年生	152	17	20	98	20	81	2

留学することのデメリット	①費用がかかる	②留学準備に時間がかかる	③卒業が伸びる	④履修計画が立てにくい	⑤就職活動に支障が出る	⑥その他
１年生	160	43	55	41	26	1
２年生	175	61	47	49	40	7

留学の成果として期待していること	①語学力の向上	②友人作り	③自身の研究を進める	④自身の内面の成長に繋がる	⑤就職活動の強みになる	⑥その他
１年生	138	37	27	95	30	0
２年生	167	52	31	97	42	1

ない状態であること、2年生はより留学について具体的に考えるようになり、3年から始まるインターンシップなど就職活動に関する情報も入ってくることがこの違いを生んだのではないだろうか。

これに対し留学中あるいは留学後の学生に尋ねると、留学のメリットとして自身の成長を最も多く挙げていた。語学力の向上はもちろんだが、それ以上に現地での生活で自身が変われたという実感があるものと見受けられる。次に留学のデメリットとして「費用がかかる」「就職活動に支障が出る」が多くあがっており、1，2年生と考えはほぼ変わらなかった。

「留学前に必要な準備」〈表４〉

問　留学前に必要な準備はなんだと思いますか？あなたが重要だと思う順番に３つ選んでください。

ここでも1，2年生の回答に大きな違いは見られず、全体の結果として1番に「語学力の向上」、2番に「留学先の生活について情報収集」、3番に「留学費集め」であった。

これに対し留学後の学生は、「留学中の生活について情報収集」、「就職活動について情報収集」、「日本について勉強」の3点に関して主に言及しており、「語学力の向上」に関しては意見が少なかった。

留学後の学生が自身の留学経験を通して「これをやっておけばよかった…」と考えることは、留学を考えている学生が、今自分がすべきことに優先順位をつけるうえで非常に重要な情報となる。より効率的な留学準備を行うためには、こうした経験者の声をもっと反映させるべきである。

最後に「留学に関して知りたい情報」〈表５〉

問　留学に関連してあなたが知りたい情報は何ですか？あなたが特に知りたい順番に３つ選んでください。

知りたい情報として多くあげられたのは「留学費用」や「留学先での授業、生活」についてであった。また、情報収集の過程で、留学先での授業や単位交換、留学費用の細かい計算などが分かりにくいという意見もあった。留学後の学生からは「情報収集している中で分からないことは先輩に聞いた」という意見が多くあり、先輩との直接的な関わりが持てる場が必要であることがうかがえる。

3-6　「ELC+K@YPU」との連携

留学希望者と留学経験の接点作りとしてプロジェクト１の「ELC+K@YPU」が有効である。木下も参加しているこのコミュニティでは、学科・学年問わず留学に関する情報交流が行われている。留学前の学生はもちろんであるが、留学経験者にとっても学習会は重要なコミュニティとして活用されている。後輩など他者に自分の留学経験語ることを通して自分の学びや経験を振り返る貴重な機会となっているのである。

3-7　課題と対応策

大学の留学情報及びアンケート調査結果から見えてきた課題は、大学で提供する情報以外に留学準備に必要な情報、そして留学希望者と経験者の意見の違いをロードマップに反映することである。これらを受けて、以下の3つの対応を行った。

・学年別、国別などさまざまな角度からアンケート

〈表４〉留学前に必要な準備

留学前に必要な準備	①語学力の向上	②研究テーマ作り	③履修計画	④留学先の生活について情報収集	⑤就職活動について情報収集	⑥留学費集め	⑦日本について勉強	⑧その他
１年生	131	10	27	71	9	56	16	0
２年生	144	11	36	78	15	70	36	0

〈表５〉留学前に関して知りたい情報

留学に関して知りたい情報	①必要な語学力	②履修計画の立て方	③留学費用	④留学先での授業	⑤留学先での生活	⑥留学後の就職活動	⑦留学後の大学生活	⑧その他
１年生	75	37	75	50	43	19	19	0
２年生	46	32	91	79	79	47	30	0

結果を集計し、ロードマップに何を載せるべきかていねいにデータを分類した。

・大学が提供する情報と学生の求める留学情報とのギャップについて分析した。

・留学の準備と成果還元に「ELC+K@YPU」を活用する方法を明確にした。

次は、以上の検討によって出来上がった「YPU留学ロードマップ」（暫定版）〈図３〉を実際の留学希望者に試用してもらう予定である。

1月の「ELC+K@YPU」活動において、ワークショップ「〇〇の留学ロードマップ作成」を開催する。ワークショップでは、各ステップにおけるtodoリストを空欄にし、個別の内容を記入してもらい全体で共有する。その結果をふまえ、ロードマップを完成する。

４　まとめ

本稿では2017年度の韓社研の卒業演習と連携をとって推進した２つのプロジェクトについて報告した。卒業演習と連携して行ったこの取り組みは、２人の担当者が他の学生と対話しながら自主的に進めた活動である。

大学主催の外国語学習会の廃止を機にスタートしたプロジェクトであったが、自身の経験を他者と共有することは、後輩たちの学習環境の整備へとつながり、学生自身のステップアップにも繋がっている。また、二つの活動を連携させることでさらなる相乗効果を発揮できたことも評価できる。

謝　辞：

プロジェクトの実施に当たってはたくさんの方々にお世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。

1　「対話的」という用語は、「主体的・ 対話的で深い学び」（学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続ける）から用いた（中央教育審議会（答申）「アクティブ・ ラーニング」の視点、p.26、2016）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf

2　国際文化学科は学位授与方針（Diploma Policy）には「行動力（実践・協働）」を「多様な文化　や価値を前提として人々と協働し、地域の特色や魅力を国内外にうち出す行動力を身につけている」と明記している。http://www.yamaguchi-pu.ac.jp/gakubu/ic/bunka/policy.html

3　「卒業演習Ⅰ・Ⅱ」のシラバス参照のこと。

4　地域住民と学生、卒業生が韓国と日本の社会文化について共に学ぶ自主学習コミュニティ。研究会の活動は韓社研HP「KIMLAB」（https://www.hwkimlab.com/%E3%82%84%E3%81%BE%E3%81%90%E3%81%A1%E9%9F%93%E5%9B%BD%E7%A0%94%E7%A9%B6%E4%BC%9A/）にて報告されている。

5　「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援：タイプB（特色型）」については本学HP（ http://www.yamaguchi-pu.ac.jp/sinka/global-top.html）を参照されたい。

6　三重大学高等教育創造開発センター編，「三重大学版Problem-based Learning実践マニュアル－実例シナリオを用いたPBLの実践―」、2007
http://www.hedc.mie-u.ac.jp/pdf/pblmanual.pdf#search=%27pbl+%E3%83%81%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%AA%E3%82%A2%E3%83%AB%27

7　キムは2014-15年度に上記グローバル事業の言語班担当者として、外国語学習会の運用に携わってきた。

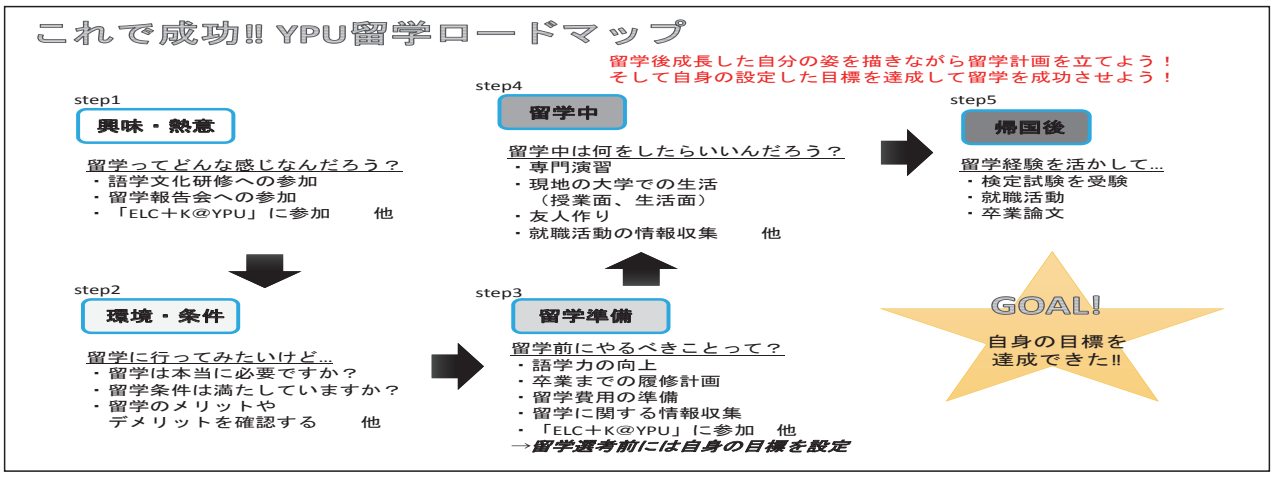
8　外国語学習会の取組状況と成果については金・森原（2015）に詳細な報告を掲載した（金恵媛・森原彩、「総合的外国語運用能力を育成するYPUの取組み：『＋α』発信型プレゼン教材の作成と外国語学習会の活性化」、『山口県立大学学術情報』（8）、pp.43-54、 2015）。

9　金・森原（2015）。

10　前期開講科目である「韓国語Ⅰa」の授業では授業の終盤に「自己紹介」を韓国語で発表することになっている。韓国語は初修言語であり、学習歴3か月でプレゼンテーションは必ずしも容易ではない。しかし、自学の習慣化、学習会でのサポートを通して学び仲間との交流が楽しめる機会であると判断し、毎年実施している。また、毎年7月の授業時間において「グローバル学生交流」で来学した姉妹校（慶南大学校）の学生との交流機会を設けている。交流会は受講生の自主企画運営によって行われることになっており、学習会の上級生がサポートを行う。

11　サークルとはクラブ及び同好会の総称である。同好会には５名以上の部員が必要であり、所定の書類　を提出した月から3か月間、毎月活動報告を提出し、サークル連合会役員会議で承認を得る事ができれば、同好会・サークルとしての活動が可能になる。

12　HRインスティテュート（著）,野口吉昭（編）『ロードマップのノウハウ・ドゥハウ』、PHP研究所、2004

13　高等教育センター「2016（H28）年度交換留学・日本語TA派遣学生留学体験レポート」（2017．7.19）

〈図３〉「YPU留学ロードマップ」（暫定版）